

## 第八章 Demak 王国の衰亡



## 第八章 Demak 王国の衰亡

### 第一節 Demak 国の衰退

〈239〉Demak のサルタン Al-Fatah 別名 Jin Bun は元マジャパヒト王国の国民で内陸部に住んでいる人たちの同情を得るのがうまくなかった。Jin Bun はジャワ沿岸港市に居住するムスリムと非ムスリム華人たちの力に依存し過ぎていた。彼は航海時代のイスラム国の建設を強く願っていた。それ故、強力な艦隊を作り上げるべく港がある諸都市での造船所の建設に注意を集中した。海上交易はまずは東インドネシアの諸島産出の香料の交易として拡大していった。

ポルトガル人たちがマラッカに来航する二年前の 1509 年に Adipati Yunus 別名 Yat Sun はマラッカ港市を奪う夢を抱いていた。マラッカへの攻撃はゴアからのポルトガル人に先を越されてしまった。1512 年の Demak 艦隊のマラッカ攻撃は、Demak 艦隊より事実上優れた武装をしたマラッカのポルトガル人たちに対して行われたものであった。その時ポルトガル人たちはマラッカ川左岸の丘の上に A-Famosa 要塞を建設済みであった。ポルトガル人のマラッカでの位置は戦略的に極めて優勢であったとみられる。〈240〉ポルトガル人たちが所有する遠距離砲は海岸に近づこうとする Demak 艦隊を敗退させることができた。このような大砲を Demak 艦隊は所有していなかった。その結果、Demak 艦隊の攻撃は失敗に終わった。Demak サルタン国の存在中、Demak とマラッカの間で、マラッカ海峡の支配とマルク諸島の香料の独占販売権を巡って敵対行為が燃えつづけた。Demak の全精力がポルトガル人の撃滅に向けられた。内陸部の人たちの生活について考慮する時間はなかったのであった。

Demak 艦隊は確かにジャワ北岸からポルトガル人を排除することと、マラッカからのポルトガル人の攻撃に対する前線として Banten にサルタンの属国を建国することに成功はしたものの、Demak 艦隊は Maluku 諸島からポルトガル商人たちを追い払うことはできなかった。

しかしながら、その大部分がポルトガル人の手中に落ちたとはいえ香料の交易は大きな利益をもたらした。

Jin Bun が頼みの綱としていた華人社会は実際には内陸部の勢力に比べて弱すぎたのであった。彼らの居住地は各港市に拡散していた。このような背景で、きわめて小さい Demak の勢力はいくつかの拠点にまだ分散されていた。内陸部からの勢力の脅威に対して、敵に対抗するためにこれらの勢力を集中させる必要があった。このような状態は内陸部に対抗する上での欠点となった。

Jin Bun が元マジャパヒトの国民を抱き込むことに失敗した影響で、Demak は彼らの賛同を失った。国民の力は本来なら国家防衛の必要性に応じて使えるものであるが、内陸部の国民に注意を払わなかった Jin Bun は彼らを敵視する姿勢を取った。宗教の問題が Demak の支配を弱める一つの原因になったことは確かである。〈241〉Demak のサルタンと同調者たちは Sunan Ngampel に教えられたようなイスラムのハナフィー派を信仰していた。しかしながら大多数をしめる元マジャパヒト国民はいまだヒンドゥー教を信じていた。Pasuruan と Panarukan 地域はヒンドゥー教地域を形成しており Demak には服していなかった。マジャパヒトの都が 1527 年に Demak 軍に占領された後、イスラムに改宗することを拒んだマジャパヒトの人たちは Dyah Ranawijaya Girindrawardhana の後を追って Pasuruan や Panarukan あるいはバリに避難した。元マジャパヒトの西部地域、とくに Pengging とその周辺部の一部はいまだにヒンドゥー教を信仰する領主たちに支配されていた。Ki Ageng Pengging や Ki Ageng Tingkir、Ki Ageng Butun、Ki Ageng Ngerang は Syaikh Siti Jenar のシーア派イスラムを信仰していた。Syaikh Siti Jenar は、うまく保持すべき秘密を明かしてしまい、イスラムの教えに違反した罪で火あぶりの刑に処せられた。

シーア派イスラムを信仰する元マジャパヒト王国地域の諸領主は Demak のサルタンに服従することを好まなかった。彼らは Demak サルタン国を狙う新勢力を形成した。彼らは狭い地域を国民とともに支配し Demak の支配から自分自身を解放しようとしていた。このように、政治的な見地から見ると Demak の勢力は分裂していたのであった。Demak は元マジャパヒト全域を支配することに失敗したのである。Demak に従いたくない元マジャパヒト地域の領主たちは独立して Demak の影響から脱し、小国を建てる夢を描いていたのであった。その中にはマジャパヒトにまだまだ忠誠を誓い Demak のサルタンに報復する夢を抱いている者もあった。Pengging<sup>1</sup> 太守はマジャパヒトの元首

---

<sup>1</sup> (訳) 現在の Boyolali 付近

長でマジャパヒト王の娘婿でもあった。この太守の Dayaningrat は彼の妻の Retna Ayu が Wikramawardhana 王の娘であるゆえに Swan Liong (Arya Damar)の義理の兄弟であった。太守 Dayaningrat の息子の Kebo Kenanga 別名 Ki Ageng Pengging は Jin Bun に服従することを好まなかった。

Demak サルタン国支配の弱体化を招いたのは Jin Bun の子孫の間の争いであった。Jin Bun が支配していた 1518 年までと 1521 年まで Adipati Yunus 別名 Yat Sun が後継者になっている間、Demak の勢力はまだ健在であった

Demak 艦隊はマラッカを占領したポルトガル人たちに対抗するためにマラッカに出撃する勇気もまだ持ち合わせていた。しかしながら、Yat Sun は子供を残さなかったため、Jin Bun の子孫たちの間で覇権争いが燃え上がり、その一方、元マジャパヒト王国地域の領主たちの中には Demak の支配に服従したがる何人かがいたのであった。

## 第二節 家族内紛争

Demak のサルタン Jin Bun は三人の妻から何人かの娘と息子を得たことについては前に触れた。Yat Sun (Adipati Yunus)と Tung Ka Lo (Trenggana)は Sunan Ngampel 別名 Bong Swi Hoo の孫娘から、Kanduran は Randu Sanga の娘から、Raden Kikin 別名 Pangeran Seda Lepen は Adipati Jipang の娘 Ratu Mas Nyawa から生まれた。紛糾を起こしたのはこの男子たちであった。

Yat Sun 別名 Adipati Yunus は長男であったため、彼がサルタンに即位するのは難しくなかった。しかし Yat Sun が 1521 年に子供を残さずに崩御した後、いろいろな問題が生じた。Jin Bun の子孫たちが覇権争いを始めたからであった。Raden Kikin 別名 Pangeran Seda Lepen は Tung Ka Ko 別名 Trenggana より年上であったが、かれは三番目の妻から生まれ、一方 Trenggana は最初の妻から生まれていた。この Jin Bun の子孫の間で覇権争いは、1521 年の日付があるスマランの三保洞廟の中国語年代記にも記されている。Babad Tanah Jawi の中では、Tranggana サルタンの息子の Sunan Prawata が Pangeran Seda Lepen を殺したために、Sunan Prawata は Arya Penangsang

Jipang に借りがあったと述べているだけである。<sup>2</sup>Sunan Prawata は Pangeran Trenggana の長男であった。スマランの三保洞廟の中国語年代記には、その名は Muk Ming と記されている。Pangeran Seda Lepen の死で、Pangeran Trenggana は Demak サルタン国の覇権を握ることができた。Sunan Prawata 別名 Muk Ming は、Trenggana のサルタンがインドネシア東部諸島からポルトガル人たちを追いだそうとしていたので、Demak 艦隊の拡充のための艦船建造で Kin San 別名 Raden Kusen に協力していた。Trenggana のサルタンは、香料の一括購入と保管のために 1527 年以降いくつかの地点に倉庫を建てることに成功したポルトガル人の手中から Maluku 諸島の香料貿易を奪う目的を持っていた。Muk Ming は五年間の内に、一隻に 400 人の兵を乗せることができる大型ジャンク船を千隻建造し終えた。この成果は褒められるべきものである。昼夜を徹してスマランの造船所の船大工たちは骨身を削って働いた。1546 年に Demak 艦隊は東方の Maluku 諸島に向けて出撃したが、その時艦隊に同乗していた Tung Ka Lo が突然崩御した。Muk Ming が長男であったためその後継者として Demak サルタン国の王座に就いた。

Trenggana のサルタン Tung Ka Lo は二人の息子と四人の娘を残した。最初の子は娘で Pangeran Langgar と結婚し、二人目は息子の Suna Prawata 別名 Muk Ming で、三番目は娘で Pangeran Kalinyamat と結婚し、四番目は娘で Pangeran Cirebon と結婚し、五番目は娘で Jaka Tingkir と結婚し、六番目は息子の Pangeran Timur 別名 Toh A Bo であった。〈244〉

Babad Tanah Jawi によると、Pangeran Timur 別名 Toh A Bo は Pajang のサルタンに従い、後日 Madiun 太守になったとある。この話は正しくないようである。スマランの三保洞廟の中国語年代記は、Toh A Bo が Tung Ka Lo の息子で Demak 軍の司令官であったと伝えている。1527 年に彼は Sultan Trenggana によってマジャパヒト王国の都を征服するために派遣されている。その一年前の 1526 年には、Sunda Kelapa 港に要塞を建てる同意が Sunda 王とポルトガル人たちとの間締結されたため、Cirebon と Sunda Kelapa に Sunda 王を降伏させるために派遣されたのであった。1552 年に覇権が Demak から Pajang に移った後、Toh A Bo は Cirebon に避難し、Sembung 華人

<sup>2</sup> Babad Tanah Jawi p81: 金曜礼拝から戻る道すがら、Sunan Prawata の差し向けた刺客の Surayata に行く手を阻まれ Arya Jipang は暗殺され、その後刺客も Arya Jipang の部下に殺された。

ムスリム社会の援助を得て Cirebon の初代サルタンになった。Toh A Bo は 1570 年まで統治した。Cirebon への避難は Pajang のサルタンに彼が服従したくなかったことがその原因である。

Arya Penangsang Jipang は、Muk Ming 別名 Sunan Prawata に暗殺された父 Raden Kikin 別名 Pangeran Seda Lepen の死に復讐するべく Sunan Kudus に扇動された。Sunan Prawata が排除されれば Arya Penangsang Jipang が Demak のサルタンになることができたからであった。この扇動は Sunan Kudus に師事していた Arya Panangsang を銜え込んだ。この話はスマランの三保洞廟の中国語年代記の記録と合致する。1546 年に Muk Ming がサルタン Tung Ka Lo の突然死の影響で Demak のサルタンに即位した時、Arya Jipang は軍を Demak に向けた。その時 Demak は無防備であった。Demak 艦隊は東インドネシア諸島で活動中であった。Arya Penangsang は Demak の町を攻撃した。Demak の町はすべて焼かれた。Masjid Agung<sup>3</sup>だけが無事であった。Jipang 軍から追撃され Demak 軍は急遽はスマランまで退却した。最終的に Demak 軍は造船所に避難したがさらに追撃された。造船所を含むスマランの町全域が灰に帰した。廟とモスクだけが焼け残った。即位したばかりの Sultan Muk Ming 別名 Sunan Prawata は戦死した。Sunan Prawata と共に同調者の数百人も殺された。華人虐殺は残虐に行われたのであった。Muk Ming の息子も犠牲になった。

Muk Ming の失脚で家族間の争いは終わらなかった。Arya Penangsang Jipang<sup>4</sup>は Jin Bun の権力を相続する Demak のサルタンの地位に付くことがかなわなかった。Trenggana サルタンの娘婿の Pajang の Jaka Tingkir がその障害になっていたからである。彼もまた失脚させる必要があった。

### 第三節 Arya Penangsang と Jaka Tingkir との関係

Jaka Tingkir は、Pengging の太守 Jayaningrat の孫で Kebo Kenanga 別名 Ki Ageng Pengging の息子であった。Jayaningrat はスラカルタ地域の Pengging の元マジヤパヒト王国の地域の太守であり、Wikrawardhana 王の娘婿であった。このように、

<sup>3</sup> (訳) 中央モスク

<sup>4</sup> *Jepan* ともいい Blora 市の東側に位置する。

Jayaningrat はパレンバンの Arya Damar の義理の兄弟であった。Jayaningrat はマジヤパヒトにまだ忠誠を誓っていた。父の Kebo Kenanga 別名 Ki Ageng Pengging はイスラムに入信していたにもかかわらず、彼は Demak のサルタンに服従することを好まなかった。最終的に、父の Ki Ageng Pengging が Demak のサルタンの送った Sunan Kudus に殺された。Ki Ageng Pengging が亡くなった時 Jaka Tingkir はまだ小さかった。Ki Ageng Pengging が Beber の観劇中に彼が生まれたので Mas Karebet と名付けられた Jaka Tingkir は、Ki Ageng Pengging の元妻であり、Ki Ageng Pengging のいとこである Nyi Janda Tingkir に拾われた。二人とも Syaikh Siti Jenar に師事した。

彼は Tingkir<sup>5</sup>村で寡婦 Ki Ageng Tingkir に育てられたので Jaka Tingkir という名で知られるようになった。大人になってから Jaka Tingkir は Nyai Ganjur の口利きで三代目の Demak サルタン Pangeran Trenggana に仕えた。口のうまさとその容貌で Jaka Tingkir は兵卒の頭になり Demak のサルタンの養子だと言った。〈246〉彼は王宮に出入りする許可を得た。彼の勇猛果敢さは群を抜いていた。それ故、彼は尊大であった。サルタンに仕えている間、兵隊に入りたがっていた Kedu の Dadung Awuk を彼が殺したことで彼は大きな過ちを一度犯した。Dadung Awuk はその勇猛果敢さで知られていたが見かけは醜かった。この見かけの悪さが Jaka Tingkir にいやな感じを起こさせた。この過ちの影響で、Jaka Tingkir はその地位をはく奪され放逐された。しかしその後、彼は Demak での仕官に成功し最終的には Trenggana のサルタンの婿養子になった。

Babad Tanah Jawi では、Arya Penangsang Jipang が Sunan Prawata の暗殺に成功した後、彼は Sunan Prawata の義理の兄弟である Pangerang Kalinyamat も退けることに成功したとある。Pangerang Kalinyamat はその義理の兄弟の暗殺を防ごうとしたのであった。Arya Penangsang の行動に対する非難として故 Pangeran Kalinyamat の妻は Danaraja 山で裸の苦行を行った。彼女は Arya Penangsang が殺されるまでこの苦行をやめないと誓った。Nyi Ratu Kalinyamat は、Arya Penangsang Jipang を殺したものには誰にでも自分の財産のすべてと Prawata<sup>6</sup>と Kalinyamat<sup>7</sup>地域を贈呈するという懸賞をかけた。彼女はこれに自分自身をかけたのであった。この話が Jaka Tingkir の

<sup>5</sup> (訳) Salatiga 付近

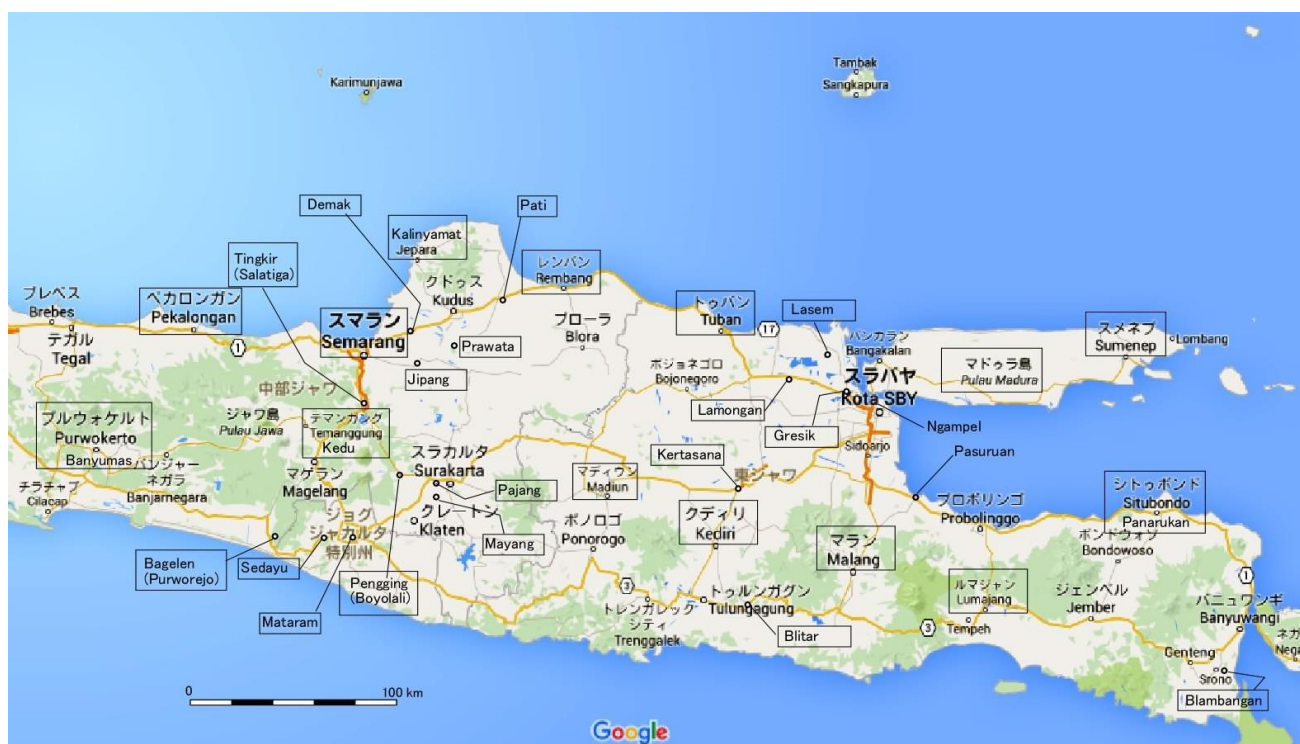
<sup>6</sup> (訳) Kudus と Purwodadi の間

<sup>7</sup> (訳) Jepara 付近



耳に届いた。Nyi Ratu Kalinyamat は自分の義理の姉妹であったために、Jaka Tingkir は Pangeran Kalinyamat の死に復讐することに賛同したのであった。このような経緯で Jaka Tingkir は Arya Penangsang Jipang と対決することになった。Ki Ageng Pemanahan と Ki Ageng Panjawi の協力を得て Jaka Tingkir は最終的に Arya Penangsang を亡き者にすることに成功した。褒賞として、Ki Ageng Panjawi は Pati<sup>8</sup> 地域、Ki Ageng Pemanahan は Mataram 地方を得たのであった。

Jaka Tingkir と Arya Penangsang との間の争いに関する Babad Tanah Jawi の解説は大いに注目を引くものである。はっきりしているのは、この当時 Jaka Tingkir は Pajang のサルタンとしての力がなかった、彼はサルタンにはなっていないものの Ki Ageng Pengging と Ki Ageng Tingkir の遺産相続人として確かに Pengging と Tingkir 地域を支配していたことである。Jaka Tingkir は Demak の属国の首長であった。スマランの三保洞廟の年代記から、この 1546 年にも Pengging の軍勢が北に移動して突然 Jipang を攻撃したということを知ることができる。Jipang<sup>9</sup> の防衛は突破された。Arya Penangsang Jipang は戦場の露と消えたのだった。



Demak の Jin Bun の王朝はたった 68 年間持続しただけで 1546 年に終焉を迎えた。

<sup>8</sup> (訳) Kudus と Rembang の間

<sup>9</sup> (訳) Semarang と Purwodadi の間

その建国から数えても 71 年間であった。その年に現在のスラカルタ市の西側に位置する Pajang で新しいサルタン国が建国された。Sultan Adiwijaya という通称で知られている Pajang のサルタンはマジャパヒト王である Wikramawardhana 王の娘と結婚した太守 Pengging Dayaningrat の孫であったので、Demak の権力はマジャパヒトの権力に滅ぼされたことになる。Jin Bun 王朝下の Demak サルタン国の倒壊に伴い、ジャワにおける大航海時代の国家権力は終焉し、内陸部に Pajang サルタン国が建国された。Pajang は艦隊を創設せず諸港湾も支配しなかった。

#### 第四節 宗派の変遷

Jin Bun 王朝からサルタン Pajang Adiwijaya への政治権力の変遷はハナフィー派からシーア派への宗派の変遷を伴った。この宗派の変遷は、1552 年に Cirebon サルタン国を建国した Demak の元軍司令官である Fatahillah<sup>10</sup> の物語(perkataan)を借用している Talang の三保洞廟の史料にも明記されている。この中国語資料はこう言っている。「Demak 軍の司令官は Demak での Jin Bun の子孫たちの中の殺し合いを聞いて失望した。Pajang のサルタン国ではシーア派がとても影響力があるので、Pajang のサルタンには彼もまた従いたくなかった」。〈248〉

Jin Bun の統治時代にはシーア派はイスラムの人たちに市場を得ていなかった。シーア派の教えは誤った教えだと理解されていた。シーア派の聖者である Sayikh Siti Jenar あるいは Syaikh Lemah Abang は Jin Bun の統治時代にハナフィー派を奉じる他の聖者たちに死刑にされた。前に説明したように、シーア派は確かに 1204 年から 1285 年の Daya/Pasai サルタン国で発展したことがあった。シーア派はインドネシアで最初に発展したとすることができる。グジャラート出身のイスラム法学者たちに多くは信仰されていたシーア派は Daya/Pasai サルタン国が Mara Silu によって滅ぼされた後、撲滅された。新しいサルタン国の Samudera Pasai はシャフィー派を奉じていた。1299 年に Aru/naruman サルタン国が Malikil Mansur の指揮で成立した後、シーア派は新風を得た。

有名なシーア派の信者はバグダッドのスーフィーのひとりの Al-hallaj であった。

<sup>10</sup> この Fatahillah の名はポルトガルの史料では Tagaril となっている。

922年に Al-Hallaj は、ana al-haqq「私は神である」という文章を定義できる教えのために、彼はイスラムの教えから逸脱したかどで宗教裁判所と対決したのであった。上記の訴えのゆえに、Al-Hallaj は火あぶりの刑に処せられた。Syaikh Siti Jenar という名のシーア派を奉じた人も同じ運命をたどった。Syaikh Siti Jenar の教えは al-Hallaj の教えを含んではいなかった。彼も自分を神と同一視していたのであった。

重要なのは Pajang サルタン国地域でシーア派が発展した背景を知ることである。しかし、なぜ Pajang サルタン国地域でシーアの影響力があつた一方、この派はあちこちでその教えが誤っているとみられてその創始者が死刑になったのであろうか。16世紀の中ごろに、Pajang サルタン国地域でのシーア派の発展の背景を知るために、元マジャパヒト王国地域での信仰の一生を展望してみる。〈249〉

インドネシアにおける昔からの信仰の生命の中心は先祖の霊に対する崇拝である。この先祖の霊に対する崇拝自体は大衆の中に宗教を形作らないが、その礼拝において重要な部分を占めている。先祖の霊の崇拝は、現在まで歴史の進行の中で持ちこたえている古代の信仰のいきづきの残滓である。インドネシアに入ってきたどの宗教でも、先祖の霊の崇拝という要素が取り込まれるのである。崇拝の儀式では毎回、「始めた人」を意味する bercikal bakal という言葉で通常呼ばれる先祖たちは常に呼ばれて忘れられることがない。インドネシアの歴史において偉大さを形作っている824年の Mendut, Pawon, Borobudur の一群の祠堂建設も先祖の霊に対する崇拝精神に命を与えている。創始者すなわち Sailendra 王家を立ち上げた人たちである先祖の霊に対する崇拝は、Sri Maharaja Samaratungga とその娘 Pramodawardhani によって Borobudur 祠堂の建設に挟み込まれているのである。初代の Sailendra 王は Pawon 祠堂で荼毘に付された。Borobudur 寺院での daçabhumi(十地)<sup>11</sup>を形どった階層を通じて、初代の Sailendra 王の霊は完璧の域に達することを願ったのであった。この巨大な仏教記念建造物は先祖の霊崇拝の精神に命を与えたのである。<sup>12</sup>

Mataram と Kediri とマジャパヒト時代に亡くなった王たちは特別な墓廟で崇拝されその人が生きていた時の王個人に生まれ変わったと解釈された dewa(神)の像を作っ

<sup>11</sup> (訳) 十地 (じっち、じゅうじ) は、菩薩が修行して得られる菩薩五十二位の中、下位から数えて第41番目から第50番目の位をいう。(wikipedia より)

<sup>12</sup> Dr. J.G. de Casparis, *Prasasti Indonesia I* (インドネシアの碑文-1)の第一部 *De betekenis van kamulan* 「神話上の国の意味」 p170 他

たのである。Winsu や Siwa の像はその多くが諸王の基になっている霊に対する崇拝の必要性から彫られたものである。妃も王の墓廟の中に像として彫刻された霊力の象徴として恒久化された時代があった。〈250〉このような先祖の霊の崇拝はヒンドゥー教が始まったインドでは知られていない。先祖の霊に対する崇拝は特にインドネシアの宗教の命の性質である。

中部ジャワと東部ジャワにおけるヒンドゥー王国の繁栄期には諸王の墓廟の維持管理は王国の費用で特別に注目されていた。ハヤム・ウルク王の時代には先祖の墓廟の数が 27 であった。この建物がどこにあったかはナガラクレタガマの第 73 節 4 項から第 74 節に明記されている。先祖たちの墓廟の建築物を維持管理するために、Wiradiakara という特別な地位が設けられた。この一つ一つの墓廟は聖典の専門である僧侶によって守られていたのであった。

王たちが特定の時に行う祖先の霊への崇敬の儀式は大規模に行われた。国民も一緒に参加してそれを感じたのだった。Demak の Jin Bun の王朝の時、経済の衰退とマジャパヒト王国の崩壊の影響で、この諸王の墓廟での先祖の霊に対する礼拝儀式はそれ自身消滅した。太守 Girindrawardhana はその費用を負担することがもうできなかった。先祖たちの墓廟とその像は放置され、維持管理も減少した結果、多数の墓廟が荒れ果てたままになったのである。

村落部の経済の崩壊に関連して形式が簡単になったとはいえ、村落部ではまだ宗教儀式が行われていた。田舎の人たちが先祖の霊の崇拝を行う祠堂は諸王の墓廟のようではなかった。諸王の墓廟は石造で耐久性があった。国民はこのような石造の祠堂を作れなかった。村ごとに木造で屋根は棕櫚葺きの礼拝所を村有地とは別な場所に建てた。これが祠堂地とよばれるものである。祠堂の中には神像がなかった。インドの祠堂とは異なっていた。〈251〉祭日には村人たちが神々にささげる供物をもって祠堂に来訪した。その時に、村人たちがささげた供物を受け取るために呼ばれる神々が化身するところとして粘土や青銅でできた小さな神像が使われた。彼らの考え方によれば、神々が住んでいるところは高い場所、山の頂上とのことである。供物が供えられる前にヒンドゥー教の僧侶によってまず toya tirtha(聖水?)で清められなくてはならなかった。Toya tirtha を準備できるのはヒンドゥー教の僧侶だけであった。供物のための toya tirtha を必要とする村人たちは僧侶にお金を払わなければならな

った。Toya tirtha は供物の上に振りかけられた。事実、これこそがまず村民たちを扱う僧侶の仕事であり義務であった。供物に Toya tirtha を振りかける以外に、この僧侶たちは村人の生活の中で他に何の役割も持っていなかった。村人たちにとって、神々への供物は避けられない義務になっていた。供物の儀式は当然のことになっていた。このように僧侶は絶対的な存在でもあった。この役割は僧侶以外のだれも行いえなかった故に、僧侶たちは村人たちから尊敬される人であり社会の中で尊敬される高い地位にいたのであった。Toya Tirtha は呪文で完成する。すなわち呪文が儀式の最高の構成要素である。呪文を知っていたのは僧侶たちだけであった。事実、僧侶になるための教育は、ヒンドゥー教の神ごとに儀式ごとに特定の呪文が望まれたのでいろいろな呪文を学習することであった。

田舎では Cikal Bakal Desa と呼ばれていた先祖の霊への崇拝の行為は神々への供物の儀式の中に潜り込んでしまった。そのことで、この Cikal Bakal Desa の行為も神としての目的になった。Jin Bun の治世下では、ヒンドゥー教の神と先祖への崇拝のためにお供物をささげた村人たちの礼拝の場所の多くは放置された。〈252〉大部分は既に壊れてしまった。新しい礼拝所は二度と建てられなかった。供物をささげた場所は特定できなくなった。重要な儀式のときに、十字路や他の場所で先祖と土地の守護神(hyang baureksa)の霊を崇拝する聖なる場所と考えられた場所に村人たちは供物を捧げたのであった。ヒンドゥー教の神への信仰は魑魅魍魎への信仰に変わった。さらに、イスラムが村々に浸透した後でも、この魑魅魍魎と先祖たちへの崇敬はそのまま生き延びたのであった。

この先祖の霊に対する崇敬に関連して、大々的にハヤム・ウルク王によって実行されたサカ歴 1284 年、西暦 1362 年の Srada の宴にここで触れておく。この Srada の宴はナガラクレタガマの第 63 節から第 67 節に長広舌をもって解説されている<sup>13</sup>。この Srada の宴についてプラパンチャは極めて詳細にわたって説明しているから、この宴の本当の進め方を知ることができる。いずれにせよ、Srada の宴は Hayam Wuruk 王による Rajapatni の霊への崇拝に深く関係している。Srada の宴がどのように行われたかは、Menuju Puncak Kemegahan の中で十分に解説したのでここでは繰り返さない。

イスラム教がマジャパヒト地域に入った後でも、先祖の霊への記念として srada の宴

<sup>13</sup> Menuju Puncak Kemegahan p194-196 参照。(訳) 2012 年発行の第 5 刷では p262-265 が正しい

はそのまま祝われていた。この srada の宴は後にジャワ語で nyadran<sup>14</sup>と呼ばれるようになった。この宴は先祖の墓地で、霊の月 Ruwah<sup>15</sup>、すなわち Sya'ban 月<sup>16</sup>、ラマダン月の前月に行われた。人々は先祖の霊の記念と崇敬の宴をするために食物を墓地に持参した。これ以外に、先祖の霊に花を贈ることを意味する penyekaran が行われた。クチナシの花、バジリコ、イランイラン、ジャスミンを先祖の墓標の上において安息香(kemenyan)を焚いて祈りをささげた。Nyadran とはマジャパヒト時代の srada の宴と同じであることは明確である。〈253〉祭事という形をとった先祖の霊への崇敬は、人が亡くなった後、7 日目、40 日目、100 日目、一年目、二年目、千日と何回も行われている。實際上、先祖の霊への崇敬である亡くなった人への霊にたいする記念としての祭事はイスラムに入ってもいなくてもジャワ人によってしばしば行われている。

先祖の霊に対する崇敬はまず Sya'ban の月に行われる。この月の名 Sya'ban 自体は Ruwah、すなわち霊の月、という語に代えられた。この名前の変化は先祖の霊を記念するためにこの月を特別扱いした影響である。この月に人は墓参をし、先祖たちの墓標の上に花を置き、20 日あるいは 21 日に祭事を催すのである。これが先祖の墓地へ参詣する月なのである。これ以外に、先祖の墓地で苦行を行う nenepi も多数行われている。聖人と考えられている人の墓地は多数の人が参詣し、参詣場所となるかあるいは、目的や意図を持つ人たちの恩恵を乞う場所になっている。その意味とは、その場所に葬られた先祖の霊がその希望を叶える手助けをするということである。この行事は先祖の霊への崇拝と密接に関係している。シーア派イスラムの教えでは先祖の霊への崇拝と先祖の墓地への参詣を禁止していない。この Shi'ah 派の社会自体、大々的に Hasan と Husein の没した日をお祝いし、その墓所は参詣地となっている。ジャワ・ヒンドゥー社会とシーア派社会の考え方は同じ方向を向いている。

国民たちは普通その意味を深く考えずに儀式を行うことがどこでも習慣になっている。儀式の基本的な意味あるいは儀式に命を与える魂の理由は、大衆が考えることではなく僧侶やイスラム法学者が考えるべきことであった。

この件は宗教の生命の教理に関する範囲となる。〈254〉

14 (訳) 聖なる場所での厄払い

15 (訳) ジャワ歴の 8 月

16 (訳) イスラム歴の 8 月

## 第五節 ワリソゴ (九人の聖者)

ジャワのイスラム社会でワリソゴ (九人の聖者)、Sunan Giri, Sunan Cirebon, Sunan Gesang, Sunan Majagung, Syaikh Kemah Abang, Sunan Undung, Sunan Bonang, Sunan Drajat, Sunan Kalijaga が知られている。これらの人たちがそれぞれ本当は誰であったかということここでは問題にしない。その中の多くは前出の解説で触れたからである。ここで注目が必要なのは、ジャワの社会ではなぜこれらの聖人が実際に必要であったが他の社会では必要としなかったのかということである。

イスラムが伝播される前はヒンドゥー教がジャワ社会の骨の髄まで沁み込んでいた。その神髄とは輪廻転生から自分を解放するということである。この目的に達する手段の一つは霊体と肉体を分離することである。霊体と肉体を分離するための手段の一つはヨガを実践することである。ジャワで多く行われているヨガは吸気-停止-呼気の呼吸法による rajayoga である。現在に至るまでジャワ人の思考方法の中で重要な役割を果たしているこの呼吸法のヨガは Vivekananda<sup>17</sup>の本で読める。指導者の指示に従って正しく呼吸をコントロールすると、とある時に超自然の段階に達する。その時にその人は自然の規則にもう縛られなくなる。その人は霊体を肉体から分離できたからである。最初は混乱していると見えたものがはっきりする。人は自分自身だけではなくすべてを支配するのである。〈255〉人はその元と融合できる。要するに kempaling kawula-gusti、神と人との合一である。これが生存中に達することができる最高のレベルである。

この高さのレベルは厳しい修行と rajayoga の実践を行う修行者によってのみ達成することができるのである。この最高レベルに達しえた人は社会の中で畏敬され尊敬されそして怖がられるのである。

マジャパヒト時代には山の麓や海岸、森の中、静かなところで多数の修行者がいた。彼らは生存中に最高のレベルに達することができるように、思考を停止してヨガを

<sup>17</sup> Swami Vivekanda 著 Rajayoga N.Kluwer-Devernter 発行 1955 年。Swami Vivekanda は内部からの気と呼ばれる呼吸法について研究した。どのような方法でこれを練習するのか、その原因は何であるか、健康や思考にどのような影響があるのか、この rajayoga の練習で何を達成できるのか。Paul Brunton 著 De Geheime Weg『秘儀』、Amsterdam の De Spiegel 出版 1955 年。

実践するために一般社会での生活を避けたのであった。ナガラクレタガマの第 80 節 4 項に、海岸や山頂、森の中に自発的に住み着いている修行者たちの心を安らかにするために海岸まで水田を渡り村々を王は訪ねる、と明記されている。修行者の中で有名だったのが Barada 師(empu)であった。Barada 師は Erlangga 王から、二人の王国を相続する王子たちのために Janggala と Daha の国境を決めるように命じられた。彼は空に飛び上がり二つの王国の国境を記すために水差しの口から水を垂らした。Kamal Pandak (Tulung Agung)付近の Bajalanggu まで来て長い服がアサムの木<sup>18</sup>に引っ掛かった。アサムの木は小さいまま(pandak)でいと呪いの言葉を受けた。これが原因で、このアサムの木が生えていた場所を Kamal Pandak と呼ぶようになったのである。

この Barada 師と Kamal Pandak の物語は Kamal Pandak 村に関する民間伝承であると確定することができる。この物語は Barada 師が最高レベルに達し超常現象を起こすことができたことを説明している。〈256〉

大乘仏教では呪文(mantra)、印相(mudra)、三昧(samedhi)を通じて最高レベルに上がることができると教えている。呪文とは霊力を含む読誦である。呪文に含まれる一つ一つの音、音素、言葉にブラーマンの力の要素としての霊力に関する課程を意味している。呪文を唱えることはその中に含まれている霊力を呼び覚ますことである。印相とは霊力を呼び起こすために最適な体の形であり、一方三昧とは思考の集中のことである。三昧で訓練を受けた彼らは超常的な能力を得るのである。呪文と印相、三昧の組み合わせは実際に、声明と行動、思考の三方向から霊力を呼び覚ますのである。この訓練を受けた sadhaka と呼ばれる聖人たちは自分の思うままにすべての力を制御することができる。特定のヒンドゥー教の神(デワ)に関連する特定の呪文を唱えることに集中するが故に、この聖人はデワに自分の中に生まれ変わるように命令する。その影響で彼は呼び出したデワの霊力を有するようになる。呪文と印相、三昧の活用は、これあるいは関係する事項に熟達したグルの指導によってのみ効力を発揮できるのである。このようなグルだけが生徒を清める権限を有している。このお浄めの結果、この生徒は霊力を得たり支配したりする権限を得るのである。

熱心な苦行と印相のおかげで人は三昧の dhyana(ディアーナ)・禅と四つの階梯に

<sup>18</sup> (訳) タマリンド



至る。最初の階梯は人がすべての欲求を捨て去る段階までである。三段階目で人はすべての思考を停止する段階に至るまでである、その段階で存在するのは自我だけである。愛憎や全ての拘束からすべて完全に解き放たれた後、変化は遅れて体の中に入り込む。個性が変わってしまう。この個性の変化は人生観の変化に影響する。〈257〉その人間性の態度が滅失してしまうのである。存在しているのは arhat (阿羅漢)である。このような状態で、かれは際限のない能力を有するのである。かれは、最初からその霊の一生の歴史とその輪廻のすべての原因を知る。彼も他人の輪廻の原因を知る。その存在はその環境での加護を構成する。これこそが生存中に至ることができる最高の段階なのである。

このすべての行為の目的の神髄は、この地球上での生活で得られるすべての知恵(gegelitan)を明確に知ることである。実際に、このすべての gegelitan は、その一つ一つが神性を持った光の放射である種々の編み物にはほかならない。精神原理のプルシャを物質原理のプラクリティから分離できるようにするために、自然の道具で見ると見かけは極めて混乱している、人生の gegelitan の位置に関して知る必要がある。それをはっきりと知ることができるようになるためには人は自然の摂理の束縛から解放されなくてはならない。自然の摂理から自己を解放するために進むべき一つの方法は三昧である。このような生命の段階は自然の中の生活とは異なり、神の生命の段階でもない。三昧を通じて、たとえその経験が一瞬であろうとも、神性ある命と一緒に経験できるのである。これこそが最高の悦楽である。人は自然の摂理から自分を解放することができるようになったので、かれもまた超常現象と呼ばれる自然の摂理を超えた何かを行うことができるのである。

このような神性ある命を共に経験できた人は同じ人間から畏敬され、尊敬されそして怖がられるのである。彼は常人ではない。ジャワのイスラム社会の目には、聖者たちも神性ある命を共に経験することができた超人として理解され、そのように扱われている。それ故、種々の超常現象が認められるのである。Babad Tanah Jawi や Serat Kanda やその他の社会に出回っているような聖人たちによって行われた超常現象に関する物語は極端に多く、ジャワ・ヒンドゥー時代における行者たちの生き方に源を置くジャワ社会の描写に他ならない。〈258〉聖者たちはジャワ・ヒンドゥー時代の行者たちのように尊敬された。創作されたものなんでも実行された。

Sunan Giri に関して、Babad Tanah Jawi は、マジャパヒト軍に対戦した中で彼はペンを投げるだけであったと語っている。このペンは動き回るクリスに変化し小隊長たちを刺殺した。恐怖でマジャパヒトの軍隊は逃げ出した。Serat Kanda では Sunan Cirebon がマジャパヒトの敵と対戦する Demak の司令官に胸当てを与えた。戦場でこの胸当てを抜くと数千匹の鼠が現れて大風が吹いた。このネズミはマジャパヒト軍の糧食を食い荒らし、一方大風は木々を倒し、マジャパヒト人が持っているすべての建物を壊した。Raden Makripat が持った Sunan Giri のクリスが戦場で抜かれると、数千匹のサソリとクモが出てきてマジャパヒトの軍を追い払った。Sunan Bonang に関しては、彼が道で追いはぎを働こうとした Raden Said(のちの Sunan Kalijaga)と会った時に分身の術で四方向に現れたと語られている。この出来事を見て Raden Said は Sunan Bonang に直ちに平伏したのであった。

Babad Tanah Jawi は、Pajang のサルタン国地方の Pengging 地域についてこのように語っている。Pengging は元マジャパヒト王国の地域である。Jin Bun 別名 Al-Fatah の治世下で、Pengging 地方はマジャパヒト王の娘婿である Jayaningrat 太守が治めていた。Jayaningrat 太守には Kebo Kanigara と Kebo Kenanga という名の二人の息子がいた。長男は仏教を信仰し、弟はイスラムを信仰していた。兄の Kebo Kanigara は山岳部で修行をしていた。亡くなった時にどこに葬られたのかは知られていない。弟の Kebo Kenanga が Ki Ageng Pengging という呼び名で知られていた Dayaningrat 太守の後継者となった。イスラム教はすでに Pengging の村々にも入り始めていた。〈259〉Kebo Kenanga 別名 Ki Ageng Pengging は Syaikh Siti Jenar に師事した。Syaikh Siti Jenar の同調者は Ki Ageng Pengging, Ki Ageng Butuh, Ki Ageng Mgerang, Li Ageng Tingkir であった。Syaikh Siti Jenar の提案で、上記の四人の同調者たちは Syaikh Siti Jenar の弟子であったので、知識を統一する兄弟関係を結んだ。

Ki Ageng Pengging は Demak のサルタンと会おうとはしなかった。Demak サルタン間の Al-Fatah 別名 Jin Bun は Ki Ageng Wanapala を Pengging に派遣して Ki Ageng Pengging が本当に何を考えているのを調べさせた。Ki Ageng Wanapala の調査結果は Ki Ageng Pengging は王になろうとする意図を隠してイスラムの修行を行うことで仮面をかぶっているということであった。このまとめは Demak のサルタンに届けられた。Demak のサルタンは直ちに Sunan Kudus 別名 Sunan Undung、すなわち Sunan

Ngampel 別名 Bon Swi Hoo の息子で Nuraga の娘の Nyai Lara Nguju から生まれた息子を派遣した。Ki Ageng Pengging は変わらず Demak には降伏を望まなかった。最終的に Ki Ageng Pengging は肘を切られて死んだ。Ki Ageng Pengging の家族は混乱した。かれらは Sunan Kudus を追いかけて復讐しようと騒いだが、それはうまくいかなかった。

Talang の三保洞廟資料に書かれているような Pajang サルタン国の地域でのシーア派に関して 1552 年に Fatahillah 別名 Sunan Gunung Jati が Tan Eng Hoat に Cirebon で説明したことは Babad Tanah Jawi の説明と一致する。元マジャパヒト王国の Pajang 地方は、イスラムの教えに逸脱していると訴えられた Syaikh Siti Jenar または Syaikh Lemah Abang の教えを受け入れていた。Syaikh Siti Jenar の奉じた神学は実存神学であった。この教えの神髄は 922 年に”ana al-haq”「私はアッラーである」と言って火あぶりの刑に処せられたバグダッドのスーフィーの Al-Hallaj の教えと同じであった。Syaikh Siti Jenar が他の聖人たちの会議に参加するように呼ばれた時、彼の答えは、Syaikh Siti Jenar は不在である、すなわち存在しているのはアッラーであるということであった。使者が戻り聖人たちにこの旨を伝えた。使者がアッラーを呼ぶために戻ると、今度はアッラーはいないが Syaikh Siti Jenar ならいるとの返事だった。〈260〉この返事はイスラムの教えに反していると聖人たちは理解した。Syaikh Siti Jenar はイスラムの教えに反しているかどで訴えられた。彼は火あぶりの刑に処せられた。Syaikh Siti Jenar は彼の教えが正しいことを信じていたので粛々とあぶりの刑に服した。Syaikh Siti Jenar はイスラムの秘儀を漏らしたかどで訴えられたのである。

この訴訟から、本当は他の聖人たちはその教えを正してシーア派と心の中では同調していたのは確かであった。しかし、この教えは既に知識(修行)が進んだ人たちに特に必要されるものであった。大衆に対して極めて難しい秘密を暴露したことは Syaikh Siti Jenar の基本的な間違いであった。放射の教えとも呼ばれる実存神学の教えの神髄は形あるものすべては神性を持つ光のほとぼしりでもあるということである。人は地球上で得られた形あるものの一つである。したがって、人も神性を持つ光であるということになる。神性を持つ光とはアッラー自身であるから、人間はアッラーであるというのである。

実際に、実存神学は、存命中に到達が可能な最高の段階に関する仏教の修行者

や僧侶たちの教えと異ならないのである。ヒンドゥー教はジャワの社会にしみ込んでいた。ジャワ・ヒンドゥー王国のマジャパヒトが既に滅びて Demak イスラム国が建国されたとはいえ、Kebo Kanigara<sup>19</sup>はそのままヒンドゥー教を信ずる姿勢を貫いた。既にイスラムに入信していた Kebo Kenanga<sup>20</sup>は Syaikh Siti Jenar の暴露した実存神学の教えを受け入れた。このようにジャワ・ヒンドゥーの社会では実存神学の哲学者はヒンドゥー教の哲学者あるいは他の場所のヒンドゥー教の哲学者の後継者として見られた。哲学者 Syaikh Siti Jenar は、ジャワ語で kempaling kawula-gusti「人間と神との間を取り持つ」と定義される、ヒンドゥー教と同じ評価の adiluhung 哲学者と理解されていた。Syaikh Siti Jenar が火あぶりの刑に処せられる心の準備はもとマジャパヒト王国のジャワ人たちに深い印象を与えた。このような心の準備は Syaikh Siti Jenar の同調者にとって、彼の教えは確かに正しいという自信を与えたのであった。

Syaikh Siti Jenar の死はその教えの正しさを守ろうとしたものと理解されたのであった

## 第六節 Demak サルタンの系譜

Jin Bun 別名 Al-Fatah	1478-1518
Yat Sun 別名 adipati Yunus	1518-1521
Tung Ka Lo 別名 Trenggana	1521-1546
Muk Ming 別名 Sunan Prawata	1546-1546

第八章 訳出終了 2015/9/21

校正 2015/10/6, 10/21, 12/10

<sup>19</sup> 訳) Kebo Kenanga の兄

<sup>20</sup> 訳) Kyai Ageng Pengging